

【ジブンゴト】

Iwata's Special Class

『We Are 地球人～「他人事」から「自分事」へ～』

【実践者】

氏 名	岩田 徳子	学校名	富山県立上市高等学校
担当教科等	外国語（英語）、総合	対象学年（人数）	第2学年（122名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年9月～12月（9時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

外国語・英語コミュニケーションⅡ / 総合的な探求の時間

02 単元名と単元目標

単元名：Iwata's Special Class 『We are 地球人～「他人事」から「自分事」へ～』

単元目標：

- ①パラグアイという国について知り、異文化にふれる中で、国による違いや繋がりを感じ、世界へ目を向ける視点をもつ。
- ②パラグアイで活躍する日本人など海外と関わりのある日本人と交流する機会を設定することで、今後の自分の生き方や進路を考える一助となれればと思っている。
- ③「他人事」ではなく、「地球人」の一人として「自分事」のように世界的な課題に向き合おうとする態度を養う。

関連する学習指導要領上の目標：

・外国語（英語）：外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

・総合的な探求の時間：探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を 次のとおり育成することを目指す。(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	国際協力の基本概念、主要な国際機関、開発途上国の現状など、基礎的な知識を正しく理解しているか。
② 思考・判断・表現	グループワークやディスカッションを通して、自分の考えを効果的に伝え、相手の意見を尊重しながら議論を進めることができるか。
③ 主体的に学習に取り組む態度	国際協力の学習に対して高い関心と意欲を持ち、積極的に取り組んでいるか。自ら進んで課題を見つけ、解決するために必要な情報を積極的に収集しているか。グループワークなどで他のメンバーと協力し、共同で課題解決に取り組んでいるか。

04 単元設定の理由・単元の意義

対象となる生徒の多くは、授業やニュースで日頃から海外の話題に触れたり、情報を得たりすることがあっても、どこか遠い国の話で自分たちには関係のない「他人事」として捉えているように感じる。「他人事」ではなく、「地球人」の一人として「自分事」として「自分ができることはないか」など世界的な課題に向き合おうとする態度を養い、世界に目を向ける機会としたいと思う。パラグアイで奮闘する立川さんやアフリカセネガルで海外協力隊員としてご活躍された安川さんと関わる機会を設定することで、今後の自分の生き方や進路を考える一助となれればと思っている。

〈児童/生徒観〉

個性豊かで活発な学年である。本校の総合学科のカリキュラムから今年度から個々に進路を意識した選択授業に前向きに努力を示す生徒が多い一方で、まだ将来の目標が定まらず、自分から主体的に行動に取りかかれない生徒もいる。授業やニュースで日頃から海外の話題に触れたり、情報を得たりすることがあってもどこか遠い国の話で自分たちには関係のない「他人事」として捉えているように感じる。長時間継続して集中力を保つことに課題があるため、興味関心を高め、生徒たちが自主的に「自分事」として考えることができるような授業づくりと問いの設定が必要である。

〈指導観〉

対象となる生徒の多くは、授業やニュースで日頃から海外の話題に触れたり、情報を得たりすることがあっても、どこか遠い国の話で自分たちには関係のない「他人事」として捉えているように感じる。しかし、私たちが使用したり食べたりする身近なモノのほとんどが海外で作られたり、海外から輸入されたりしていることから私たちの生活は密接に海外と繋がっており、むしろ日本は海外を頼らざるを得ない状況である。それらを実感し、海外で起きていることが「他人事」ではなく、「地球人」の一人として「自分事」として「自分ができることはないか」など世界的な課題に向き合おうとする態度を養い、世界に目を向ける機会になってほしいと思っている。また、海外と関わりのある方との交流を通して、「海外なんてあり得ない」ではなく「海外もあり得るかも」などと今後の自分の生き方や進路を考える一助となれれば願っている。

05 単元計画（全 9 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 2	「私たちの身の回りのものはどこから来るの？」	自分たちが日ごろ何気なく使用している製品や口にしている食べ物が当たり前にあるのではないこと、自分たちの生活と他の国が繋がっていること、自分たちの消費スタイルが国際協力に繋がることを知る。	・自分の身の回りにある製品や口にする食べ物がどこから来ているか調べ学習を行う。調べ学習を通して、日本と世界との密接な繋がりに気が付く。 ・化粧品のラメやスマホに使われる原料など日本に輸入される日用品の裏側を「マイカ」を通して児童労働の実態について知る。 ・自分たちができること（商品の選択、消費スタイルなど）を考え、意見交換をする。
資料・教材など ・世界との繋がりワークシート（アフリカとの繋がり）・パワポ ・児童労働について取材した VTR			
3 4	「世界の果てまでイッテ Q in PARAGUAY！」	地理的に日本の反対側に位置する「パラグアイ」について国の概要について知り、興味関心を高めることができる。	・フォトランゲージを含んだスライドショーを通して、パラグアイに関するクイズを解きながら国の概要を知る。パラグアイの食や工芸品、現地通貨などを見たり、触ったり 5 感を通してパラグアイを感じる。
資料・教材など ・パワポ ・教師海外研修の現地で撮影した写真、映像、資料 ・ニャンドゥティ（伝統工芸） ・グアラニー族の工芸品（弓矢） ・テレレ（マテ茶） ・アオポイ（衣装） ・パラグアイ通貨 ・世界地図			
5	「Iwata's Special Class」番外編	レポート課題から、友達や周りの意見にも耳を傾け、多種多様な意見があることに気が付き、他者の意見を尊重しながら国際協力への方法を考えることができる。また、次週からの進路学習として、自分の将来を考え、お越しいただくパラグアイで活躍する日本人「MIDORI 工房立川さん」について知ることができる。	・各クラスをオンラインでつないで実施する。 ①レポート課題では、「私たちの身の回りのものはどこから来るの？」の授業を受けて、問い「“同じ地球人”として自分たちができること、日々の生活の中で協力できそうなことは何か？」について個々の意見を書く。今回はクラスごとにグループになり、この問いについてグループディスカッションを実施する。 ・各クラス 2 グループから自分たちが出した答えを発表する。 ②ライフプラン（自分の将来像）を記入する。 ③次回お越しいただく MIDORI 工房と立川さんについての概要を知り、立川さんへのインタビュー内容を考えて、記入する。
資料・教材など ・パワポ ・レポート課題のコピー ・グループごとに意見を記入する白紙 ・ライフプランワークシート兼インタビューワークシート ・MIDORI 工房の Web サイト			
6 7	「スペシャルゲスト① パラグアイで活躍する日本人～MIDORI 工房立川さん」	パラグアイで活躍する日本人との交流から、自身の今後の生き方や	・MIDORI 工房立川さんに来校して頂き、立川さんの講演を聞いたり、ワークショップに参加したりする。

		進路を考える一助とすることができる。	・事前に考えたインタビューを行う。
	資料・教材など ・パワポ ・ワークシート ・ライブプランワークシート兼インタビューワークシート		
8	「スペシャルゲスト② 海外協力隊員～安川さん」	JICA が行っている国際協力事業や海外協力隊の活動内容、SDG について理解を深めることができる。	・海外協力隊 JICA 出前講座から海外協力隊員をお迎えし、JICA 事業内容や海外協力隊員の活動を知り、開発途上国の生活や文化、国際協力活動について理解を深める。
	資料・教材など ・パワポ ・JICA 国際協力機構ホームページ ・ワークシート		
9 本時	「私たちにできることはあるのか」	同じ地球に生きる“地球人”として「自分事」として自分たちができる国際協力について考えることができる。	・自分ができそうな国際協力があることを実感する。「JICA 海外協力隊 職種一覧表」から自分がやってみたい、できそうな職種を1つ選んで今後の生き方や進路を考える一助とする。
	資料・教材など ・パワーポイント・ワークシート・Padlet・SDGs カード（大）掲示物（アイデアのヒントとなるよう掲示）・模造紙・ペン・タブレットパソコン		

06 本時の展開（9 時間目）

本時のねらい：これまでの授業から同じ地球に生きる「地球人」として「私たちができる国際協力」を「自分事」として考え、その考えを他者との対話を通して共有することで様々な意見や考えがあることに気付き多様な視点と学びを得る。また、これまでに関わった立川さんや安川さんの例から、自分が得意なことややってみたいことを JICA 海外協力隊職種一覧から調べ、考えることで今後の生き方や進路を考える一助とする。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	○本時のねらいを共有する。 ○これまでの振り返りを行う。 ・各テーブル3～4人ごとのグループでタブレットパソコンを1つ使用する。 ・Padlet のホワイトボード機能を使用してこれまでの授業（「私たちの身近なものはどこから来たの？～アフリカとの繋がり」、「世界の果てまでのイッテ Q in パラグアイ」、「パラグアイで活躍する日本人～立川さん」、「アフリカセネガルで活躍する日本人～安川さん」）の4つのカテゴリーから印象に残ったテーマを話し合って1つ選び、付箋機能に印象に残ったことを（代表者が）記入する。	・タブレットを使用する上でルールを明示しておく。 （①使用するタイミング以外は触らない、②代表者のタブレットのみ使用し、その他は個々のタブレットは使用しないなど） ・タブレットパソコンを使用する上で不備があれば、代替として事前に用意しておいた模造紙とペンを使用して記入させる。
展開1 (20分)	○問いを提示する。 ☆問い「“同じ地球人”として自分たちができること何か」 ・各グループでこれまでの学習内容を参考にしながら具体的にアイデアを出し合う。	

展開 2 (15 分) まとめ (5 分)	☆ワールドカフェ形式で実践する ①第 1 ラウンド：テーマについて話し合いながら探求する。前回のプリントに記載した「自分たちにできること」を個々に持ち寄りグループで話し合う。話し合った内容を模造紙にメモ代わりに自由に書き出す。ラウンドが終わる頃に、グループで残る人物を一人決め、他のメンバーは全員が別のテーブルに移動する。 ②第 2 ラウンド：アイデアを共有し、深める。 残った人物が、自分のグループで話された内容を新しいメンバーに説明する。各自、自分がいたグループで話し合われた内容を紹介し、会話を深める。その際に、模造紙に新しいアイデアを追加したり、つながりを発見したりする。 ③最終ラウンド：気づきや意見を統合する。 全員が最初のグループに戻り、別のグループで得られた気づきや理解を交換する。出たアイデアや言葉を会話しながら、自由に模造紙に付け足していく。 ④全体でグループごとに発表する。 各グループから 1 名の代表者が全体に向けて「自分たちができること」を発表する。 ○問いを提示する。 ☆問い「もしあなたが海外協力隊員になったら、どこの国でどんな活動をしてみたいか」 ① プリント「JICA 海外協力隊 職種一覧表」あるいはタブレットパソコンから「JICA ホームページの職種検索」から自分が得意なことや将来やってみたいことを思いながら探す。 ②グループでそれぞれの意見を共有する。 ③全体で共有する。 ○ 授業の振り返りをオンライン上のアンケートフォームで回答する。	・ ワールドカフェ形式についてルールと合わせて、大まかに説明する。 ・ 第 2 ラウンドで、別のグループに移動する際に 1 つのグループに多くても 5 人までとなるよう指示する。また、話が本題から逸脱しないように促す。 ・ 結論を導き出すことが目的ではなく、できるだけたくさんの様々なアイデアを導き出せるように言葉掛けを適宜行う。 ・ 他者の発表に対して批判するのではなく、様々な考えやアイデアに傾聴する態度を言葉掛ける。 ・ 「パラグアイで活躍する立川さん」や「アフリカで海外協力隊員として活躍された安川さん」の例をもとに、話を振る。 ・ 以前設定した生徒それぞれの「ライフプラン」に「海外」や「国際協力」が進路の選択肢の一つになり得ることを示唆する。 ・ 時間がない場合には、帰りの会の時間に各クラスで実施してもらうなど本日に回答してもらう。
---	---	--

使用する資料・教材：

パワーポイント/ワークシート/Padlet/SDGs カード（大）掲示物（アイデアのヒントとなるよう掲示）
/模造紙/ペン/タブレットパソコン

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

【知識・技能】これまで学んできた開発途上国の現状などを理解し、問題に向き合うことができるか。

【思考・判断・表現】グループワークやディスカッションを通して、自分の考えを効果的に伝え、相手の意見を尊重しながら議論を進めることができるか。

【主体的に学習に取り組む態度】国際協力の学習に対して高い関心と意欲を持ち、積極的に取り組んでいるか。自ら進んで課題を見つけ、解決するために必要な情報を積極的に収集しているか。グループワークなどで他のメンバーと協力し、共同で課題解決に取り組んでいるか。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・MIDORI 工房 立川氏
- ・JICA 国際協力出前講座

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

以下、生徒の発言を抜粋したもの

- ・普段から多くの人が使っている身近なものが児童労働によってつくられていると知った。
- ・国際協力で自分にできることがいろいろあることが分かった。
- ・私より小さい子が大変な環境で働いていることが分かり、そこで取られたものは、私も使っていると知り、考えなくてはいけないと感じた。
- ・まず知ることによって自分が相手の立場にたって考えることができるようになった。
- ・貧しいだけの国だと思っていたけどフレンドリーだったということを知れたようにアフリカへの印象が変わりました。
- ・おしゃれを楽しんでいたりして、日本と似ているところがたくさんあると分かった。
- ・自分の勝手なイメージで決めつけてしまっていたとわかった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

- ・海外にも目を向けてほしい。
- ・遠く離れた日本の反対側で、日本にルーツをもつ人々が自分たちのアイデンティティを大切にしながら遠く離れた日本への想いを次の世代へ引き継ごうと努力されていること、パラグアイという国でチャンスを見だし、さらなる明るい未来への架け橋を築こうと起業する日本人がいること、そして（人種やルーツにとらわれずに）日本に想いを馳せ、日本のことを考えてくれている人々がいること。
- ・一つの物事でも一方向から見るのではなく、様々な角度（視点）から見て、視点を変えて考えてみてほしい。
- ・日本は他国に対して〇〇してあげているではなく、世界の協力があって今の日本があることを忘れてはならない。「途上国＝かわいそう、日本の方がえらい、たぶん日本は大丈夫だろう」ではなく、「途上国＝可能性が大きい国、移住でなくても、生活の一部が海外にもなり得ること、日本の外にも視野を広げていく必要性」
- ・「廃材全てが宝物」MIDORI 工房立川さんより 貴重な資源を大切に。
- ・〇〇人として⇒地球市民として一緒に考える

12 苦労した点

- ・自分の授業を通して生徒の成長や学びに「こうなってほしい、こう思ってほしい」と期待したことが、その通りに行かず悩んだ。例えば、生徒の発言の中に「日本に生まれて良かった、こういう子どもたち（児童労働をする児童の姿を見て）がいるから自分たちの生活が成り立っているから、感謝したいと思った」などという意見があり、多様な意見や考えを尊重するが、異なる立場からではなく“同じ地球人とし

と一緒に考える”立場を促すような指導の仕方について、どのようにすれば生徒にそのような意見や考えをもってもらえることができるか悩み苦戦した。

13 改善点

- ・2 学年 120 名弱を対象としたので、人数が多く目の行き届かない部分も多くあった。今回は、大人数の生徒の国際理解、国際協力への入り口となったと思うが、一つのクラスに絞って実施するなど、少人数で深く時間をかけて実施する方法も良かったかもしれないと感じた。
- ・より多くの先生方や保護者を巻き込んだり、また外部との連携を行ったりして広く活動できたら良かった。JICA 北陸と協議した中で、何か合同でできないか今後も継続して関わらせて頂く予定である。
- ・授業のスケジュールから確保できる時間も限られていたが、1 回～9 回を実施するにあたり、回毎に間が空きすぎたことから継続性が途切れることもあった。
- ・生徒がより一層“同じ地球人”として“自分事”のように思考を巡らせることができるような発問の仕方や促し方。

14 成果が出た点

9 回目の授業後にアンケートを実施したところ、意外にも生徒からは「今回の授業を受けて外国に興味、関心をもった」、「今まで知らないことを知ることができて良かった」という意見が多く聞かれ、この授業を機に今後の自分の暮らし方や生き方を考えるきっかけとなったり、また世界についても“自分事として”という言葉が多くみられたりして嬉しかった。

15 自由記述

今回の授業実践は、ほとんどの生徒にとって国際理解や国際協力への“入り口”程度だったかもしれない。それでもこの授業が、多くの生徒が世界に目を向けるきっかけとなり、世界で活躍する日本人の例から今後の生き方や進路を考える上で参考となっていればこの授業を実践して良かったと感じる。そして、生徒の中に“同じ地球に生きる地球人”として“自分事”のように世界の課題に向き合おうとする素地が少しでも養われていたら嬉しい。